

住民参加創作ミュージカル

「群青 濱田誕生そして明日へ」

## 壮大な400年 歴史絵巻

洲 浜 昌 三

序曲が流れ、紗幕一面に投影された現在の浜田が過去の風景に移り変わり、江戸時代の浜田城絵図で止まる。激しい音楽、薄明かりの中に家康、三成が浮かび、紗幕が上がると、東軍と西軍の激しい戦いの群舞。やがて東軍の勝ち鬨。去っていく三成。紗幕が下り、進行役で藤井恭郎が演じる郷土史家・大島幾太郎が親しみのある口調で、歴史を語りはじめ。

舞台は、関ヶ原の戦いで始まり、一気に観客を引き込んで、数々の場面がテンポよく展開され、二時間半飽きさせなかった。

浜田開府四百年を記念して創作された「群青 濱田誕生そして明日へ」は、十月十一、十二日石央文化ホールで開催され、両日で千五百余りの人たちが観劇。浜田の歴史を振り返り、ふるさと浜田の現在と明日を考える得難い機会になった。

3年前にこの企画を聞いたとき、難しい挑戦だと思った。四百年の町の長い歴史をどのように舞台化するのか。下手をすると、「歴史場面寄せ集め舞台」になる恐れがある。特に「明日へ」は難しい。良いところだけ取り上げ、夢や希望を語り歌えば、「ご当地賛歌ミュージカル」になりかねない。

実際の舞台を観て、それは私の杞憂だった。脚本と演出を担当した木島恭は浜田出身で、今までに抱月や今津屋八衛門など浜田の人物や歴史を舞台化し、成功している実績があり、ミュージカル「はだしのゲン」では、今回作曲を担当した高橋慶吉とともに海外公演の経験もあるベテランである。

舞台は、分厚い多層構造で、60近い場を含め、劇としてもまとまった13場面で構成されている。

1619年松坂藩の古田重治が石見統治を命じられる「江戸城内の場面」。浜田の鴨山に城を定める「浜田・鴨山」。藩主に世継ぎがない「古田騒動」。「本居宣長塾で学び塾を開く」浜田・長善館」。鎖国の禁を侵して死罪になった「橋本三兵衛と今津屋八衛門」。

長州軍との石州口の戦い「岸静江」。「浜田城炎上」  
「島村抱月と松井須磨子」。日本画家「橋本明治」等  
々。

過去の劇と劇の間に、現代劇が5場面挿入され、4  
人の同級生が浜田の現在と明日を語り論じ合う。一人  
の青年は東京に住み、迷いながら最後の場面では親や  
親友に浜田へ帰って仕事に就く決意を告げる。

数々の場面をつないだのが大島幾太郎の解説や映  
像、生演奏（指揮・山崎勝）、力強い合唱、そして戦  
いや火災、地震の場面で繰り広げられるダンスや群舞  
である。これらが、効果的な照明、紗幕の使い方と相  
まってテンポよく展開され、統一感を生み出し、躍動  
感のある壮大な人物歴史絵巻になった。

劇中歌は「伝統 そして未来へ」「この土地に根付い  
て」「たびだちく亀山城」などたくさん独唱、重唱、  
合唱で歌われた。

歌唱では、音域や声量、音色など個人差が大きい。  
それを生かすか殺すかは音響ミキサーにあることも改  
めて感じた。

過去はいつも 未来のために／学び伝えて 今を生  
きる／ここがふるさと／私たちの町 私たちの町

市内を中心に集まった60人の高らかな大合唱と観客  
の盛大な拍手のなかで緞帳は下りた。

一貫して浜田の演劇をリードし、今回の監修も務め  
た岩町功に「集大成ですね」と声をかけると「そうで  
す」と短い確かな答えが返ってきた。

これまでの10本以上の住民参加創作ミュージカル  
を成功させた実績と歴史があり、そこで培われた人材  
があったから花開いた舞台だった。

（日本劇作家協会会員 大田市演劇サークル  
劇研「空」代表）